

諫早市総合教育会議議事録

令和5年度 第1回

令和5年度 第1回諫早市総合教育会議

1 日 時 令和6年1月24日(水) 15時30分～17時00分

2 場 所 諫早市役所 8階 8-1会議室

3 出席者 市 長 大久保潔重
教 育 長 石部 邦昭
教 育 委 員 山口 秀雄
教 育 委 員 原田 裕介
教 育 委 員 中野 高子
教 育 委 員 小野 靖彦

4 会議に出席した職員

企画財務部次長	村井 一郎
教育次長	田島 正孝
教育総務課長	江頭 大一
学校教育課長	田上 顕二
生涯学習課長	竹島 健吾
学校改革推進室長	池 政信
少年センター所長	張本 潤
子育て支援課長	関山 浩一
学校教育課参事補	納富 真司

5 傍聴者 1名

6 議 題 意見交換
テーマ「不登校の対応について」

その他

○教育総務課長補佐

それでは、定刻になりましたので、ただいまから令和5年度第1回諫早市総合教育会議を開催いたします。初めに、本日の出席者のご紹介をいたします。

(出席者の紹介)

本会議議事進行につきましては、教育長にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○教育長

それでは私の方で進行させていただきたいと思っております。

初めに大久保市長からご挨拶をお願いしたいと思っております。

○市長

今日は、昨晚からの積雪で、足元の悪い中、令和5年度第1回諫早市総合教育会議ということで、委員の皆様方にはお集まりいただきましてありがとうございました。

積雪の関係は今のところ、危機管理課からも、特段何か問題があったわけではないということで報告を受けておりますけれども、昨日から情報連絡室を立ち上げて、少し予防的に対応にあたったということもありますけれども、ご承知のように元旦に北陸能登半島で発生しました地震で、今でもまだ救護活動あるいはこれからの復旧・復興という過程に入っていくと思っておりますが、子供たちが遠く離れたところに避難をしているというようなニュース報道もありますので、ぜひ教育分野においても、やはりこの有事あるいは災害を想定した準備をしていかなといかんのかな、なんて思ったりもしております。

いずれにしても本当に日頃から、教育委員の皆様方には諫早の教育行政についてご理解またご指導をいただいております。おかげさまで着実に諫早市の教育改革も進んでいると私も感じておりまして、引き続きご指導賜りたいと思っております。

今日のテーマが不登校ということでありまして、少年センターからもおこしいただいておりますけれども、非常にやっぱり市内の子供たちの抱える問題というのを、しっかり把握をしながら、どういうふうに対応していくかということも今後の大きな課題になろうかと思っております。

ぜひ委員の皆様方にも、お知恵をいただきながらしっかりと教育行政を邁進していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

○教育長

ありがとうございました。

それでは意見交換に入りたいと思います。今回は今、全国的に増加傾向にあり、長崎県も同じ傾向でありまして、諫早市でもやはり増えてきている不登校の対応について、喫緊の課題でもあることから、意見交換を予定しております。皆様からご意見をいただき、これからの教育行政に生かしてまいりたいと考えておりますので、どうぞ、活発な意見交換をお願いしたいと思います。では事務局から説明をお願いいたします。

○学校教育課長

総合教育会議の資料の1ページから3ページまでについて、私の方から概要を説明させていただきます。

資料の1ページをご覧ください。1ページの一番上に「不登校の定義」とあります。

「不登校の定義」について、お示ししております。

一つ目の丸になりますが、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にある者」というふうになっております。

二つ目の丸は、「病気や経済的理由、新型コロナウイルスの感染回避による者を除く」ということで、三つ目の丸ですけれども、年間30日以上登校しなかった者を不登校というふうに今カウントしているところでございます。

二つ目の黒塗りの四角ですけれども不登校児童生徒の全国・県・市の比較ということですので。この表をまず読み解くときに一番わかりやすいのが、この表の一番右側になります。令和4年度の割合というところをご覧ください。

一番右側の縦になりますけれども、一番上から小学校、中学校そして一番下が小・中学校という流れになりますが、それぞれ全国・県・諫早市というふうに並んでいます。この割合というのは、在籍する児童生徒数に対する不登校者数の割合です。

令和4年度は全国、県に対して諫早市の小学校はそれほど高くない割合であります。中学校の方は大体全国と同じぐらいの割合、小中学校合わせて見ますと、全国、県に対して諫早市は少ない状態ということであります。ただし、左側からの令和2年度、令和3年度からすると若干増えていると、増加傾向にあるということは、否めないという現状にあります。

その次、下の方の表に行きます。本市の不登校の要因になりますが、一番左側に要因が言葉で「いじめ」から「友人関係」とずらっと並んでおります。これは各学校からの報告によるもので、複数の要因が考えられますので、1人の子供で複数の要因があげられるということになります。例えば、上から「友人関係」が48、「親子の関わり方」が50、「生活の乱れ」が53、一番多いのは「無気力」で185となっております。もしかしたら複数回答する場合には、多くの子がこの「無気力」というのにも

カウントされるのかもしれないと考えております。

2 ページの一番上に<対応として>とありますが、諫早市の対応を示しております。一つ目ですが、まず大前提が各校で不登校の要因を分析すること、電話連絡や家庭訪問による情報提供、支援の方が大事になります。二つ目です。「養護教諭」とはじまる場所ですけれども、県から派遣されておりますスクールカウンセラー、またスクールソーシャルワーカーとの連携も重要になってまいります。四つ目、少年センター内の適応指導教室「ふれあい学級」での不登校児童生徒の相談、細かな支援というのを諫早市は行っております。五つ目、最近話題になります。フリースクール等の民間の施設との連携ということについても、現在進めているところです。

四角の黒塗りであります「諫早市立小中学校における不登校児童生徒が学校外の民間施設等において相談・指導を受けている場合」、「自宅でICT等を活用した学習活動を行った場合」における、つまり出席扱いにするかどうかのガイドラインの通知が参っております。これを受けて諫早市でもガイドラインを設定して、昨年9月1日から運用を開始しているところでございます。四角で囲ってある部分が2ヶ所ありますが、上の方の四角がフリースクール等民間施設の流れになります。①から⑧まで細かく段階を区切ってありますけれども、民間施設に子供が通う場合に、それを出席扱いにするかどうかということについては、市教委の方でも、学校に準ずる教育がなされたのか、子供たちの教育に資する内容であるかとか、施設の内容であるかということについても細かく確認をしながら、最終的には校長判断ということにしています。ICTについてもそれに準じて判断をするということになっておりまして、特にこの出席扱いについては丁寧に慎重に行っているところです。

3 ページの方をご覧ください。

不登校対策関係連絡会でございます。児童生徒の不登校関係に関する情報交換、これを定期的に行うということで、毎月1回1時間程度で行っております。それ以外にも不登校に関する情報交換は密に行っているところです。

その下に長期欠席児童生徒報告ということで、グラフが二つ並べてあります。上の方が小学校、下の方が中学校になります。不登校の数がどんなふうになっているか、令和3、4、5年度と行を変えて示しております。上の小学校の方、黒い表示が令和5年度ですが、若干、他の年度よりちょっと増えていると、下の方が中学校で、これについても黒色の本年度の数が増えているということになって、若干中学校よりも小学校が割合的には多いのかなというのが見えるところです。現在の諫早市の現状、対策については以上です。

○教育長

どうもありがとうございました。

ちょっとだけ私の方で追加させていただきます。資料の1ページをご覧ください。

3ヶ年の全国・県・諫早市の割合が出ておりますけれども、例えば令和4年度につきましては、小学校が94人、中学校が206人、合計300人と中学校が多いんですが、ただこの3年間を見ても、小学校が48人、58人、94人と、中学校が139人、166人、206人と、若干、小学校の子供たちが増えているということが言えようかと、低年齢化しているという危機感を持っているところでございます。

○少年センター所長

少年センターには、不登校生徒の学校復帰の支援を行うために「ふれあい学級」というものを設置しております。この「ふれあい学級」では、不登校児童生徒や保護者に対して個別の相談を行ったり、小集団による体験活動を通して集団生活への適応を図るという活動を行っております。

お手元にあります資料は、毎月子供たちの活動を中心にしたふれあい学級だよりになりまして、小中学校そして相談に来られた方、通級している生徒の方へ配付をしているものになります。

○教育長

学校教育課長および少年センター所長からの説明がありましたが、何か質問等ございませんでしょうか。

○教育委員

事務局にももう少し詳しくデータを教えていただきたいんですけども、4点ございます。

1点目に今、小学校と中学校の不登校者数の合計を教えてくださいんですけども、具体的に小学校1年生から中学校3年生までの学年別の内訳を教えてください。

2点目は、少年センターのふれあい学級の利用者数も、学年別に教えていただければと思っております。

3点目ですけども、中学校からの進学先として通信制の高校を選ぶ生徒は、年々どれくらいの数がいらっしゃるのでしょうか。

最後に4点目です。不登校の要因の中でここ数年で明らかに以前とは違った要因が多くなってきたと感じられることがあれば教えていただきたいと思います。

○教育長

委員の方から4つ今質問がございましたけども、どうですか。

○学校教育課参事補

申し訳ございません。令和4年度の問題行動不登校調査における学年別の資料は、今手元にございませませんが、低年齢化も踏まえて、資料にあります長期欠席者報告をもとに、少し今年度の学年別の不登校傾向、長期欠席者の動向ということでお伝えをしてよろしいでしょうか？

先ほど教育長からもありましたように、低年齢化がかなり進んできていることが、今年度の長期欠席者の数値からもかなり出てきております。

例えば、先ほどのカラー刷りの資料のグラフを少しご覧いただければと思っております。今年度、小学校においてグラフから大体10月に長期欠席者が多く上がっているんですけども、一番気になるところがありまして、小学校で4月の段階ではゼロであったけれども、10月の段階で小学校1年生が16人、小学校2年生が4名、さらに小学校3年生で16名ということです。細かい数字を持ち合わせていないところですけども、少しこのところが気になるところであります。

中学校に至りましては、中学校3年生と中学校2年生の数は大体変わらないぐらいの数が上がってきている中で、中学校1年生は、同じように4月の段階では数が少ないんです。やはり皆さん、入学したら気持ちを高めながら、5月の連休明けぐらいから人数が増えてきている状態でありまして。大体大まかに言いますと、中学2年生が中学3年の半分ぐらいの数字で推移している状態でありまして。令和4年度不登校調査の学年別に関しては改めてお知らせをしたいと考えております。

○少年センター所長

少年センターの「ふれあい学級」に通級している児童生徒が、今年度34名おります。児童生徒の学年別ですけども、小学校4年生が3名、小学校5年生が4名、小学校6年生が4名、中学校1年生が8名、中学校2年生が5名、中学校3年生が10名です。

○教育長

大体例年、そんな感じですかね。

○少年センター所長

昨年度はちょっと多くて43人通級した人がありまして、令和2年度が31人、令和元年度が30人ですので、昨年度はちょっと多くて今年度は例年と同じかちょっと多いかなと思います。

○学校教育課長

通信制進学は、数がそこまで大きく増えていることはないんですが、特にその不登校との関係は、今ちょっとまとめてはいないんですけども、やはりこの通信制が、重要なポイントになるのかなという気はしております。

○学校教育課参事補

最近の不登校の要因の傾向としましては、様々な要因があるというのは間違いないところでありまして、最近の傾向としまして、コロナ期間中で最初にコロナになって1週間出席停止となって、その後、家族の方がコロナになったら濃厚接触になり、当時は本人も出席が停止になってしまい、そうこうしているうちに今度はまた別の家族の方が、なんて言っているうちに1ヶ月以上の期間で、来れないということが続いて、複合的にいろいろ要因があるんですが、数値でみた場合にはコロナの3年間で、数が上がってきたというのは、数値上間違いないと思われま。そちらの方は今様子を見ながら、学校と連携を進めているところでございます。合わせまして、兄弟での欠席者が増えてきたという現状がございます。

○教育長

通信制については、私、諫早高校の定時制の校長もしておりました。そういう中で、夜間定時制なので働きながら来る子供もいるんですけど、やはり不登校であるとかいろいろなことで、定時制に来た子供がおりまして、中学校のときはほとんど学校に行っていない子供が、高校に来ると休まないで来るとか、それで大学にも行った子供もいますので、ある面での救いになっているという感じで教育をしておりました。

そういう子供たちも、やっぱり学びの機会を与えることは非常に大事なことだと感じたところでございます。

○教育委員

学校側の民間施設とフリースクール等を含むというところで大体どのような民間施設があるんでしょうか？

○学校教育課参事補

現在、フリースクールになりますので、今諫早市の中で2か所申請がありましたので、実際担当が訪問しまして、担当者と話をして、出席を学校で依頼をしていく。

他市町の2ヶ所に通っている児童生徒がござい。こちらの方が5名です。今現在延べ11名の児童生徒が出席の方は扱わせていただいているということであります。

○教育委員

これはやっぱり全部フリースクールっていう形ですか。

○学校教育課参事補

民間施設というくくりになります。ご本人がフリースクールといえばフリースクールになってしまうんですけども、一般的には民間施設という捉え方の中で、学校外の民間施設という取り扱いになります。

○教育委員

フリースクールに付随しているんですけど、他市で2ヶ所というのは大村市と長崎市になりますか

○学校教育課参事補

2か所とも大村市になります。

○教育委員

フリースクールだと結局民間が運営しているので、どうしても利用料が発生します。利用料がどの程度かかるかご存知でしょうか。

○学校教育課参事補

こちらも様々でして、例えばある施設で入会金が3000円した場合に、1回の利用につき500円もしくは1000円とか、利用料を取られているという施設がございます。だいたいそのあたりの値段になってこようかなと考えております。無料のところはございません。

○教育委員

2年ぐらい前だったと思うんですけど、福岡市がフリースクールに補助金を出していたのを出さなくなると、福岡市が出してくれないととても運営ができないということで、福岡市のフリースクールが困っているという報道があって、その後どうなったかは私はよくわからないんですが、フリースクールもきちんと運営していこうと思うとそれなりに費用がかかるはずですし、料金が安ければ確かに利用しやすいけどというなんかその辺の問題はありそうな気はしています。

ですから福岡市もかなり前から補助金を出していたみたいなので、きちんとしたことができるフリースクールがもしあるのであれば、一応義務教育の期間であれば諫早市から、そういうところに補助をすとかいうお考えはありますでしょうか。

○学校教育課長

そこに対する支援については、まだ考えていないところです。

○教育委員

2ページ目の「本ガイドラインによって諫早市において出席扱いとなる流れ」で、四角で八つぐらいあるんですけども、一応、教育委員会による民間施設の訪問で施設の概要とか活動内容等の把握は、これはもうできているってことですか。

訪問後、申請についての報告を行い、校長が出席扱いの認定を判断されるって書いてありますけれども、あくまでいち校長先生の判断なのか、こうだったら出席扱いになりますとか、そういう何かあるんでしょうか。

○学校教育課参事補

出席扱いの最終的な判断の流れになると思いますが、この民間施設に担当が行って確認するとき、当然施設の設備であったり、私が担当としてよく行くんですけども、一番大事にしているのは、そこに通っている児童生徒を施設と学校とみんなで連携して、情報共有ができるかということが一番大事にしております。ですので、その施設の施設長様に子供たちの頑張った成果を学校と共有していただけるように依頼をしております。そこに理解をいただいたところに、教育委員会としてこの施設であれば子供さんが学べる環境としてはいける。その後、施設から学校に定期的に活動内容の情報共有がされています。これは文書であったり、毎日の電話連絡であったり、そういうものを通して、共有をしていただく。それを共有した学習内容を見て、これだったら出席にできるという最終決定は校長先生の判断です、

○教育委員

そういうところの判断ですね。ちゃんと出てきているとか、授業を受けて、施設の方から校長の方に報告があって、校長がそこで判断をすると、これだったら出席でもいいよと。

○教育委員

不登校要因で最近よく言われているヤングケアラー問題が出てきていると思うんですけども、それは「親子の関わり方」の方に入っていると判断してよろしいでしょうか。

○教育長

これについては子育て支援課の課長も今日は来られていますのでどうでしょうか。

○子育て支援課長

この分類がどうなっているかっていうのはわかりませんが、おそらくそうではないかと思います。

○教育長

もう少し現状を深堀してみたいと思いますが、先ほどから出ております不登校が低年齢化しているということですが、それはどういうことで低年齢化していると考えておられますでしょうか。

○教育委員

私は、「子どもとメディアとの関わり方」という内容でいろんなところに講話に行くんですけども、その時に保護者から小学校の1年生の段階で、YouTube やゲームから離れることができないという相談をたくさん受けます。ですので、不登校の低年齢化はゲームを含め、インターネットとの関係性も大きいような気がします。

○教育長

今もちょっと出ましたけど中1ギャップっていう現象があります。小学校とガラッと体制が変わり、教科担任制で担任がずっとついているわけではないとか。今日は学校改革推進室長も来ておりますけども、例えば、それを解消する手立てとして、義務教育学校などで中1ギャップもなく小学校から中学校へのスムーズな移行する、なんかありますか。

○学校改革推進室長

義務教育学校につきましては、義務教育9年間を通常であれば、63制なんですけれども、例えば54制であるとか432制とか子供たちの発達にそってというか、柔軟に学年割ができるということがございます。

それで中学校に上がる時の子供たちのストレスが少し和らぐことで、いわゆる中1ギャップと言われるものの緩和であるとか、解消に繋がるという効果があるということをおっしゃっております。

ちなみに私達も先進地視察で飯塚市であるとか、長崎市の野母崎にある青潮学園とか、視察に行かせていただきましたけども、現場からもそういうお声は聞いたところがございます。

○教育長

各学校でも不登校については熱心にいろんな手立てをされていると思うんですけども、先ほども資料の説明にもありましたように、養護教諭とか心の相談員とか、スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーとか、そういった人たちとの連携の中で、何としてでも1人でも多く救っていかう、不登校を少なくしていかうという試みはされていると思うんですけど、スクールソーシャルワーカーとか、スクールカウンセラーとか、そういった働きってというのはどんなふうを考えればいいんでしょうか。

○少年センター所長

少年センターには、県派遣のスクールソーシャルワーカーが1名おられまして、不登校児童生徒の相談にのったり保護者の相談にのったりしております。そういった相談の中身ですが、経済的なことであったりとか、家庭的なことであったりとか、なかなか学校の先生方の踏み込んでいけないところ、そういった部分も相談にのるという役割をしております。

○教育長

現在、スクールソーシャルワーカーが少年センターに1名配置されているということですが、予算要求等において増員を今申請しているという段階であります。

○教育委員

少年センターについてですが、少年センターへの問い合わせは、例えば、保護者の方が学校に相談して学校の方から少年センターを紹介されるというやり方なのか、少年センターへの問い合わせというのはどういったのが一番多いんでしょうか。

○少年センター所長

少年センターへの問い合わせは、保護者の方からのご相談が一番多くなっております。学校の方にも、私が昨年10月に小・中学校に少年センターの「ふれあい学級」のことについて説明をしまして、もし「ふれあい学級」に通えそうな児童生徒がいたら、学校の方からも進めていただきたいというお話をしておりますので、学校からの相談も最近は増えてきております。

○教育委員

そろそろ少年センターの名前も変えた方がいいのでは、少年少女の時代だと思うんですけど、そういうところが何か、昔の考え方のところがあるのかもしれないと、ちょっと一瞬思うんですけども、いかがでしょうか。

○少年センター所長

委員のおっしゃったように、まさに少年センターから非常に堅いイメージがあるのかなと思っております。今まだ案の段階ですけれども、教育支援センターという子供たちを支えていくようなイメージが持てるような名称ができればいいかなと考えております。

○教育委員

やはり今不登校は、昔の古典的な不登校の子供だけではなくて多分、昔の古典的な不登校の子はやっぱり一生懸命頑張っているけれども自分の要求水準を満たせなくなる、きつくなって休み出すという古典的な子供さんだと、社会との繋がりがきちんと保てていれば、大抵良くなって行って高校、大学とかちゃんと社会に出ていける方が多かったのが、なんていうか、先ほどメディアのこともありますけれども、小学校で突然行けなくなってしまうとか、子供の親御さんによる教育の問題とか、精神的な心理的な問題を抱えている親御さんによる養育のための問題とか、いろんなことが出てきて多様化してきているんだと思うんです。

ですから、古典的な元々最初に問題になったような不登校の子供さんに関しては、少年センターがすごくいいと思うんですが、最近増えてきたような子供さんに関しては、少年センターに通うことが全然できない子供さんが増えてきているので、フリースクールであるとか、多様な取組がどうしても必要になってきているのではないかと考えています。だから、そうなってくるとソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーカーの活動の場が広いのではないかと。いろいろな要因の中で、家庭的な問題があるようなところだとソーシャルワーカーが入らないと把握できないと思うので、その辺もぜひ予算をつけていただきたいということと、何とか学校に行ける子、少年センターでうまくいく子、フリースクールでうまくいく子、ひきこもり状態でフリースクールに行けないような子とか、要因も様々ですし、不登校の程度も様々なので、それぞれの子供さんにここで個別に対応ということで書かれていますので、ただそれをやろうとすると多分マンパワーがすごくいるので、そう簡単にはいかないなとは思いますが。うちでもカウンセラーにカウンセリングしてもらっていますけど、カウンセリングに来れる人はまだいいですね。親子でカウンセリングに来られる人もいますし、子供さんは全然来ないのにお母さんだけずっとカウンセリングしているような人もいますし、お母さんももう途中で来なくなって、あとどうしてるんだろうという方もいるので、本当に多様な状況だと思いますので何とかよろしく願います。

○教育長

今、委員の方からもありましたけど、委員はそういった医療的な相談等を今、専門にしています。学校からのアプローチ、また市教委からのアプローチだけではなく、そういった別の観点からのアプローチは、非常に大事なことと思いますが、もう少しどんな感じが教えていただければと思います。

○教育委員

なかなか難しいですね。小学生ぐらいで来られた人だと、また子供さんとのコミュニケーションが割とすぐにとれると思うんですけど、中学生ぐらいになってくると、うまくコミュニケーションが取れるような状況の方であれば、ずっと来ていただけますが、来た時からすごく表情も硬くて、コミュニケーションがなかなか取れないような人だと次なかなか来てもらえません。ですから、本当にいろいろです。

家庭の問題が明らかにあるような人もいますし、虐待に近いようなこともあるのではないかと思う人もいますが、でもそこにはなかなか介入はできない。とりあえず繋がっていただければいいかなというレベルの方もいらっしゃるの、なかなか一概には言えないっていうか。年齢が上がれば上がるほど、なかなか子供たちとのコミュニケーションが取れない。何回かずっと来てもらって、来たときの顔表情が明るくなってくればよくなっていると、学校に行かないけれど、この子はよくなっているなと思えるような人もいます。

○子育て支援課長

先ほどの少年センターの話もありますが、第3の居場所ということで、少年センターにもまだ行けない、出席扱いにはならないけれども、子供たちが学校に通えるような環境になればということで、第3の居場所ということで市内に1ヶ所開設をされています。

そこでは、朝食の提供や学習支援をやったり、あと体験活動を経て自然の中で遊んだりするような活動もその中でやりながら、そこに行けるような環境を作って、少しでも学校の方に行けるような環境を作ってあげたいということで取り組みをされている市内民間事業者の方がいます。

○教育長

一方で、児童虐待等も含んでいろいろと相談があるんじゃないですか。

○子育て支援課長

不登校という中の実際の我々の相談においては、現状、12月の報告で、小学生23名、中学生15名の方が、我々が扱っている児童虐待の中の対象になっており、小学生13.1%、中学生では5.8%が対象になっています。それぐらいの方が不登校という括りの中の児童虐待というような関係状態ではあり、不登校の中の一部ではあり、一因ではあると思っています。

○教育委員

不登校の問題でいくと、不登校の子供も確かに大変ですけど、不登校の親の問題が、やはり取り上げられなければならないと思います。例えば先ほど少年センターもそうなんですけれども、どうしても子供の方にだけのフォローになり、親の方までのフォローアップをしなければいけないというところに、この不登校の問題というのは深いところがあるんじゃないかと思われると思うんです。そこを解決しない限り、不登校がなかなか解決できることは難しいところ。これも進行も含めてっていうところもあるんで、いろいろ出てくると思うんですけども、その辺のところはもう少年センターあたりで例えばご相談があったときに親の問題というのは出てきてないでしょうか？

○少年センター所長

少年センターでは、臨床心理士の先生、小児科医の先生、精神科の先生による専門相談員の個別相談会ということで年間17回開催しております。

その中で、保護者の方は、当然お子さんのことで相談に来られるんですけども、その専門相談員の先生に保護者の方の相談もしていただいております。

あとスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーがおりますので、保護者と繋がって医療や福祉を紹介したり、そういった保護者の困り感に寄り添う対応をしているところでございます。

○教育委員

保護者の支援っていうところでの関連ですけども、やっぱり今、子供だけじゃなく保護者も何かあればインターネットでいろんな事例を引いたりすると思います。ですので、行政の方でも、インターネットで今どういう不登校に関する情報が流れているとか、どういう検索が多いとか、どういうインフルエンサーが流行っているとかなどを把握しておかれることもとても重要なキーワードになると思っています。

○教育委員

例えば医療の問題だったら、お母さんは何番に電話するとかってありますが、不登校の場合で最初に相談するときには、そういうのってありますか。

○少年センター所長

本市におきましては少年センターが相談窓口になっております。

○教育委員

少年センターが不登校関係に関してのコンシェルジュみたいなものと考えてよろしいですか。

例えば、よくある話でいくと、もしかしたらADHDかもしれない。だけど親御さんはなかなか認めたくはない。でも学校にうちの子が迷惑をかけている。どうしよう。子供を出さないとか、そういうことがあったときに、相談しやすい、すぐにでも相談できる体制はやっぱり必要になってくるので、ぜひその辺のところをよろしく願いしたいと思います。

○教育委員

一つはこの不登校の定義で不登校の人数が決まっていて、この人数を減らすことが目標であってはいけないと思っていて、結局子供たちが学校に戻ってこれればそれが一番いいと思うんです。だけど、最終的には、その子供たちがきちんと社会に出て、社会で社会人としてちゃんと暮らしていけるように支援していくということが多分一番大事だろうと思っていて、不登校の定義に入る子供さんを減らすために、とにかく学校に来る子の数を増やすということが目標になってしまうと、ちょっとまずいのではないかと考えているところがありまして、その学校に行けない子、学校に行けなかったとしても、ちゃんと社会に出ていける準備をきちんとしてあげられるようなサポートが必要かなと。

さっきもお母さんだけカウンセリングに来られるといいましたけれど、お母さんの支えがとても大事だと思っていて、やっぱりそのお母さんだけでも来てもらうということは非常に大事だと思っていますので、さっき言われたようにやっぱり家庭も親も支えるというか、そういう体制が必要ではないかと思えます。

○教育長

学校に戻すだけが不登校対策ではないということは、もうその通りだと思います。今、出ましたように、学校、家庭、地域のそれぞれの役割と連携という観点で、話を進めていきたいと思いますが、それぞれの役割、連携というのはどんなことを考えればいいでしょうか。

○教育委員

例えば各地域に健全育成会があって、そこを中心に通学合宿をしてくださったり、そこのお手伝いに保護者を巻き込んでくださったりしています。よく委員が、諫早はボランティアをしてくださる方の数がとても多いとおっしゃってますので、地域を巻き込むことが非常にしやすい土地ではないかと思っております。

○教育委員

先ほど言いましたヤングケアラーの問題からいけば、やはり地域との密着性がやっぱり発見するには一番早いということが出てきます。ただ、それに隠れた貧困の問題がどうしても出てきますので、その辺のところはやはり探ることが難しいところがありますけれど、諫早は先ほどお話があったように非常にボランティア活動が強い市でありますからその辺のところに期待したいところはあるんですけれども。ただ、先ほどからの意見でいくと、不登校の全部が全部マイナスではないとの考え方でいけば、地域が家庭をもしかしたらフォローアップできる要素はあるかもしれないと思った方がいいかもしれません。

○教育長

何らかの形で支え合うといいますか、ただ、プライバシーの問題でありますとか非常に入っていきにくいところもあるのかなって感じはします。

先ほどから言われているように、諫早での地域との密着ってというのは、強みだと私は思っていて、そういう面でのみんなで支え合うことは大事なところかなと、この前のPTAの研究大会でも、1人も取り残さない、そういうPTAの方の活動を非常に心強く感じたところではあります。

先ほどから出ておりますように、子供たちをただ学校に戻すだけではなく、社会的自立を目指すんだというような考え方は、これはもう今、文科省の方でも言われている話でございますので、その辺、学校教育課長、どうでしょうか。

○学校教育課長

フリースクール等の通知等でもわかるとおり学校以外の場で社会へ繋いでいくと、様々な道から社会に繋いでいくっていうのは、時代の趨勢ではないかなと思っております。

学校教育課として学校に関わることで先ほどの学校・家庭・地域の役割とかありましたけど、学校としてどのような取り組みでいけばいいのかと考えたときに、やはり、子供たちが学校に行きたくなるような魅力ある学校づくり、そのためにやっぱり授業がわかりやすかったり、楽しかったり学びがいがあるものであったりというようなこと、また人と人との繋がりがっていうのを作れるような学校とか、もしくは自己肯定感

を身につけておくことができるような体験活動であるとか、様々な活動というのを教師も工夫して、作っていかねばいけないと思ったところです。

○教育長

魅力ある学校づくりで、友達ってというのは大きいですよ。友達がいるから学校行くみたいなの、どうですか。

○学校教育課長

今日は雪の日でしたけれども、いろんなところの地域に聞いてみれば子供たちは雪が楽しそうでした。雪を手握りながら活動していたということで聞いておりますけれども、様々なことをして相手とわかり合える共感するといいますか、その活動というのは人間の教育においても非常に重要と我々も考えております。友達の関係で、いつも仲良しじゃないときも当然あって、喧嘩したりいろんな関係も出てきますけれども、その中でやっぱり自分自身を高めていけるような、それがやっぱり社会に繋ぐという大きな一歩じゃないかなと思っております。

○教育長

今日は、給食週間が今週始まっております。市長それから教育委員、私が諫早小学校の給食に行きまして、6年生、3年生、1年生ということで、私が1年生だったのですが、クラスの雰囲気もすごく良くて、仲がいいのかなと思って、この子供たちは、不登校にならないのではないかなと思ったんですが、委員は何か感じるころはありましたか。

○教育委員

まず今日は、給食が美味しかったし、久しぶりっていうか、保育園をしているので、またその下の子たちとの関わりはあるんですけども、初めて小学校行って、一緒に給食を食べるっていうのは、本当に貴重な経験でした。

やっぱり小学校も今教育長がおっしゃったように、ちっちゃい方がやっぱり活気があるんです。いじめだとか要因としていくつか挙げていただきましたけれども、あんだけ活気があったのが、この一番多いのが無気力っていうことです。やっぱり大きくなっていくと次第にだんだんと気持ち的なものがこうなっていくのは何でかなって、その無気力っていうのを学校もそうなんですけれども、地域を使ってとか、やっぱり一番は今言われたように、お父さんお母さん家庭の方の支援っていうか、行政の方々には対策としてあるんですけども、またもう一つ、今日の皆さんの意見も含めて、また違った対策も練っていただければと思います。あんだけ元気なかわい質問をしてくる子が、みんな仲良くて、我先に言葉をおもうとしていたのが、無気力っていう

のが悲しくてしょうがないですね。何かまた違った、これプラス何かいろいろなみんなの知恵を出し合って、委員言われたように、最終的に社会に出て、仲間でみんな一緒にできるような子供になってほしいなと今日は強く思いました。明るく元気な子たちと触れさせていただきまして、子供たちのために、笑顔をなくさんように頑張っていきましょう。

○教育委員

ちなみにその「無気力」に関して、その他の要因と組み合わさって無気力になったと思うんですけども、例えば学業不振とかが大きいところとかないですか。

○学校教育課参事補

要因として学業不振は、最近の傾向としてはないかなと、他のいろんな要因が複合的に絡まっている中に学業もあるかもしれないんですけども、いろんな人間関係だったり、そういったところが大きなものかなと考えております。

○教育委員

以前ある中学校だったんですけど、そこでちょっとお話をいろいろ聞いていたときに、4月はみんな張り切ってやってくると、ところがゴールデンウィーク明けになると急に来なくなっちゃう。そのときの原因が何かって言ったら、張り切ってやってきたんだけど、学校の勉強でわからないのが急に多くなったと。小学校のときに掛け算、割り算、分数の計算がうまくできていなかったの、中学校へ行ったら数学はそれができないと全くわからない、ちんぷんかんぷんだからもう行かなくなる方が多いんですよってというのが、ちょっと昔なんですけど中学校で聞いていたもんですから、学業というのは結構ウエートがあるのかなと思ったんですけど、現状はそうじゃないということですか。

○学校教育課参事補

こちらの認識としてはわかりません。

○教育委員

私が数年前まで5年ほど中学校で相談員をしていたときに、ある日突然、勉強が嫌になったわけでもない、友達が嫌なわけでもない、親が嫌なわけでもないのに、ある日突然学校の前に行ったら足が動かなくなったと話す子供たちがとても増えていた印象があります。

このように具体的な理由がないのが、無気力と私は認識をしておりました。そこで、いろいろ話を聞いてみてもやっぱり本人もわからない、周りも登校しやすい雰囲気

作って、その時間だけでも登校できるよう設定するんですけども、なかなか解決の糸口が見つからないというところがこの無気力の難しいところでした。

○教育長

不登校の子供たちも、やっぱり学校とか担任とか友達とか繋がっていることが、私は大事なことのかなと。学校に行けないけれどもどこかで繋がっている関係は築けないだろうかと思って、それがタブレットあたりではないのかと。オンライン学習も含めて、せっかく全員に行き渡っておりますので、授業を録画したのを見たり、もしくはオンライン学習とかできないのかと思ったりもしますが、現場ではどんな状況でしょうか。

○少年センター所長

ふれあい学級の子供たちも1人1台配布された端末を持ってきて、学習に取り組んでおります。ある中学校の生徒は、担任の先生とメールのやり取りをしながら、「今日はこんなこと頑張ります」とか送って、担任の先生が授業がないときに「そんなこと頑張っているんだ」「頑張ってるね」とかですね、そういったやり取りもありますし、学校の様子も先ほど教育長からありましたように授業もそうなんですが、学級だよりとか学校だよりを送ってもらって、今こんなことやっているんだという感じで学校と繋がっているんだと思います。

あとデジタルドリルを導入している学校では、その子供が自分の理解度に合わせて学習をしております、その成果が学校で把握できるようになっておりますので、学校の先生が「こういうふうに頑張っているね」と励ましの言葉を直接子供にかけてもらっている、そういった活用をしているところです。

○教育長

今日の話聞かれて、企画財務部次長、いかがでしょうか。

○企画財務部次長

なかなか難しい話ですね。確かに先ほどからお話に出ていますように社会的に生きていく力っていうのをつけてほしいというところが最終的なものだと思います。今、引きこもりの人が多いですね、増えてきているんです。8050とかですね、80歳の高齢の方が、50歳のひきこもりの子を支えている状態で、ご高齢の両親が亡くなると、必然的にその方は破綻するような、そういった状況が諫早でもやはりみうけられる状況があります。ですから、そういった引きこもりの方に増えていかないように上手く社会側の方で生活ができるような形に持っていかないと最終的には思っております。

○教育長

今日のご意見等も踏まえて、教育委員会としてもいろいろとヒントをいただいたんじゃないかなと思うんですけど、私達は不登校を何も悲観的にだけ見ているわけではなくて、これを突破口にいろんな諫早の教育を展開していきたい。少なくなれば一番それがいい、ありがたいことなんですけども、いろんな政策をするうちに、この子はこのチャンネルでヒットしたとか、いろいろと手立てはして行って、こっちの子は、この政策でヒットしたというような、全部が全部そうなるとは限らないとは思いますが、そんなことを考えていきたいなと思っております。

最後に市長のご意見、ご感想、また総括的なまとめをいただきたいと思います。市長よろしくお願ひします

○市長

まず、今日私も諫早小学校の給食交流会ということで、諫早小学校、母校の6年生ということで、献立も今日は和風で、麦ご飯を久々食べましておいしかったし、おかずは甘辛系の鯨のかつで、子供たちを見ていたら結構パクパク食べていたんで美味しかったんだと思いますね。汁物もいろいろ具材が多くて、非常に栄養バランスのとれた給食で良かったと思います。その後の質問で、私の場合もう6年生でしたけど二つ質問が出たんですけど、一つは「市長になってよかったと思えることがあったら教えてください。」と、もう一つは「市長として市をどうしたいですか」と、もうそのものズバリ議会の質問かなっていうぐらいに、丁寧に時間オーバーするぐらい答えさせていただきました。嬉しかったことは、やっぱり私も諫早市のために、市民のために行政を執行していくわけですから、他人のためにして「ありがとう」とお礼を言われたらすごく嬉しいよという話をさせていただきまして、また市をどうしたいかっていうのは、6年3組が20人ぐらいですか、我々のときにはその倍ぐらい多分いたと思うんです。だから今の方が先生たちもすごく多分、目が行き届くんでしょうけども、やっぱり多いときは多いときで、本当に活気がありましたので、やっぱり諫早の人口を増やしたいと、そういう言葉で言っても、6年生は理解ができるんですよ。そういう話をして非常に有意義な交流会でした。

私の方から質問をさせていただきたいと思います。先ほども委員の皆様からも出た質問で少し重複はするかと思いますが、この不登校が増加傾向にあるということと、低年齢化傾向にあるということ、原因は不登校の要因ということで、これは複数回答ありということでもありますけども、やはりこの無気力というのが非常に多い、その中には、先ほど出たような対人関係であったり学業不振であったり、それから委員が言われたゲームとかインターネットで、まさにこの生活が昼夜逆転したりとか、そういったこともあるんだろうと思いますけれども、そこら辺りの分析と、それから、もし子供たちに精神的な疾患が何かもしあって、そういう子供の数が増えていて、ひ

よっとしたら医療的なアプローチが必要なのかどうかということも含めて、その傾向と対策あれば、委員に医師の立場でも少しお答えいただけたらなと思います。

もう一点の質問は、この少年センターで、今毎月四つ葉だよりでいろいろな行事の紹介がありますが、自然体験活動であったり、農園活動であったり、福祉体験とか奉仕活動とか、非常に素晴らしい活動をされているなと思います。そこらの結果とか報告とか、何か改善効果が、例えば奉仕活動をやってから少し子供たちが変わったとか何かそういうのがあれば教えていただきたいと思います。

○学校教育課参事補

ご質問の件で全て網羅できた回答になるかわからないんですけども、まず低年齢化をずっと見ていく中で、一つの気付きとしましては、先ほども申し上げたかもしれませんが、やはり兄弟が不登校の報告に上がっている兄弟は、少し他のお子様よりも確率として高い割合で不登校になっているといった傾向があると思います。単純に考えた場合に、「お兄ちゃん、お姉ちゃんは学校に行っていないのに、なぜ私が行くの」と子供さんの中にはあるのかなと、そこを引き起こしたお兄ちゃんお姉ちゃんたちの世代の不登校傾向になった一つの大きな原因は、多様化された居場所が求められている中で、価値観が多様化したこともあり、やっぱりコロナというのも一つ大きなものだったかなと実は思います。そういう中でだんだん増えてきた結果、ご兄弟の方も増えている。その数がやっぱりどうしても少しずつ年々、低年齢化してきたなと感じているところです。ここに対してアプローチを各学校が取り組んでいる中で、先ほど言われていたいろんな医療機関に繋いだり、そういう中では、各学校でこの困り感を持っているお子さんの中には少し配慮が必要だと、いろんなところに、関係機関の連携が必要なお子さんはたくさんいらっしゃいます。ここは担任が1人で抱え込まずに、必ず学校はチームで管理職を中心としまして、担任だったり、養護教諭だったり心の相談員の先生だったり、スクールカウンセラーだったり、その束ねる特別支援コーディネーターもいますので、チームとして課題を抽出して、この制度はどういう使い方をしたらいいかというところで、全ての学校が対応しているところですので、それに伴いまして、教育委員会の方でも特別支援が必要なお子様をどうしていくかという担当もおりますし、総合的な考え方で、いろんな子供たちの困り感に対応していくというふうに考えて行っているところでございます。

○少年センター所長

ふれあい学級での体験活動での子供たちの変容ですけれども、この四つ葉だよりの6月号の裏面をご覧ください。6月号の裏面に諫早農業高等学校の寺峰農場を訪問させていただいて動物ふれあいという体験活動を年2回体験させていただいております。子供たちは最初、小動物をかわいいという感じでいくんですが、高校生から話を聞いて

ていく中で、そこに飼育している牛、鶏、そういったものを最終的には私達が生きていくために食べるんだよというお話を聞くと、やはりかわいだけじゃなくて、そこには命があるんだと、そういったことまでぐっと踏み込んで考える子供たちが増えました。

そして7月号になるんですけれども、裏面の方見ていただきたいと思います。福祉体験で諫早幼稚園の方に関係させていただいたんですけれども、先ほどもお話ししたように、ふれあい学級には小学校4年生から中学校3年生までの年齢が異なる子供たちがいるんですが、中学生はやっぱり小学生に対してお兄さんお姉さんのような立場で接しているんですけれども、小学校4年生であっても幼稚園に行く自分たちは今度はお兄さんお姉さんになって幼稚園生と接していると、普段はちょっと甘えているところがあったんですけれども、そこでは、園児をやさしくサポートしてあげたり、園児のために準備をしてあげたり、そういうことも見えましたので、いろんな年齢とかいろんな動物とか、そういったものに触れることによって、より深く、体験活動の成果が表れているんじゃないかと思っております。

○教育委員

ADHDとかASDの子供さんが必ずしも増えているわけではおそらくなくて、そういう病気の認知度が高まったので診断されていると。例えばASDの子供さんの診断でスクリーニング的なテストがあります。そういうテストをやると正規分布なんです。そのASDという病気が明らかになって、正常の人、ASDの人と点数の分布がなるはずなんですけど、一方性で生理分布なので、この一番こっちのところでカットするかっていうことで、診断が決まってくるようなところがあって、だから、なんていうんでしょうか、本当の古典的な自閉症の子供さんと、ASDっぽい子供さんということで行くと、かなりグレーになってきて、その辺どうなのかなと思っております。だからそういう傾向はもうみんな持っていて、それに困っている人で診断がついちゃう人たちが増えているんだろうと思うんです。ADHDになってくると、本当に薬で症状がよくなるのか、私はあんまり薬を出したことがないので、ADHDでは薬を飲むと「集中するってこういうことだったんだね」と子供さんが言うことがあります。本当に治療してあげた方がいい人が一部いて、それっぽい人たちがたくさんいて、そのそれっぽい人がその子たちに合わせた対応をしてあげられれば、自己肯定感を下げることなく、うまくいくのではないかなと思っております。ただ、その自己肯定感を下げないように相手をしてあげるためには、大人の方が少し余裕を持って接してあげられないといけないし、学校でもその子のためにそれなりの配慮をしましょうというふうになっていますけど、今いくら人数が減ったとはいえ、みんなに一律に授業をしてそれをしないといけないから、本当にできる子とできない子と差も大きいでしょうから、なかなか授業を成り立たせるだけでも大変なところに特別な配慮をするのはさらに大変

なことになってきます。先進国の中で一番教育費を使ってないのが日本ですから、もっと異次元の少子化対策で学校の先生の数を倍にするなどの必要があると思います。保育園も戦後からずっと園児に対する保育者の数は増えていません。もうちょっと子供たちにお金をかけて人も増やして、それぞれの子供たちに合わせたことが余裕をもってできるようにして欲しいと思います。

あともう一つは、個人情報保護のことがあるもんですから、結局学校とのコミュニケーションは結構大変というか、学校の先生も多分医療者に対してなかなか敷居が高く、医療者の方も学校の先生となかなか上手くコミュニケーション取れない、両方も忙しいというのがあって、ですけどお互いの顔が見えるような関係を作れることが大事ではないかなと思っております。諫早で、保育園と小児科医とか、小児科医と小・中学校の先生方とか、一緒に難しい話じゃなくてもいいので集まってできるようなものがないかと思っております。

○市長

貴重なお話ありがとうございました。今日は子育て支援課長もいますから保育士、それから教員、市から国への要望にはぜひ要望項目に異次元の子育て支援ということで挙げさせていただきたいと思います。

今、少年センター所長からふれあい学級のご報告ということで、特にこの農園の活動と福祉現場での活動の紹介がありましたけれども、私もかつてこの農業っていうのは非常に良いということで、最近の農福連携とか、農業と福祉の連携というのを言われていますけれども、農業と教育の農教連携っていうのもあっていいのかなというふうな思いがしております。やはり、そういう自然を相手に業をなすということが、その子供たちの将来の自立とか、そういうことを考えたときに、福祉とかそういう農業の分野というのは言い方がどうかわかりませんが、やっぱり現場は人手不足して、外国人の力でも借りらんばいかんというところに、早い時期に入っているいろんな体験をするっていうことが、ひょっとしたらその中から将来の諫早の、日本の農業を担うとか、福祉を担う子供たちが出てくるかもしれません。福祉はどっちかっていうと対人関係もあるでしょうけど、今の農業はあんまり対人関係がないので、そういうのが得意じゃない子供たちには非常にいいのかなという気もしたりします。特に諫早は今、第一次産業も力を入れて、多様な農業を展開しておりますので、ひょっとしたら担う子供たちがこういったところから出てくるかもしれないとちょっとふと思いました。諫早らしい連携っていうかあり方かなっていうふうに思ったりして、必要があれば福祉からまた農林部の方にもお繋ぎしたいと思います。

○教育長

今日は、貴重なご意見、また卓越した示唆に富んだ話をさせていただいて本当にありがとうございます。教育委員会も全力投球でこの後も進んでいきたいと、また教育委員の皆さんも一緒になって、定例の教育委員会等でも、こういう話をずっと深くしていきたいと思います。ただ、あんまりこちらが緊張してガチガチにやってしまうと長続きしないので、ちょっと大人の対応として余裕を持って、こういう問題について進めていきたいと考えています。教育長としても不登校の問題については、喫緊の課題として全力で取り組んで参りますけれども、皆さんと連携しながら、先ほどいろんな連携の話を、最後は市長からいただきましたけれども、いろんな方々とスクラムを組んでやっていきたいなというふうなことを最後思いました。

それでは本日の会議につきましてはこれで閉会をしたいと思います。

どうもありがとうございました。